

矢島茜(3年) ダンス・プロデュース研究部(Folkwang大学との交流)

8/3.4の2日間、ダンスプロデュース研究部の活動でドイツのFolkwang芸術大学から学生をお呼びし、WSを開催していただきました。ドイツ内外から学生が集まっているため、国籍もさまざま今回日女に来てくださった5名の方も内2名が日本人、他3名の国籍、年齢もバラバラでした。

WSではFolkwang大学の実際に授業で習っているものを教わりました。ウォーミングアップからテクニック、コンビネーション、インプロビゼーションからグループで創作していき、最後にはショウイングを行いました。

今回、英語で進んでいくWSだったので、理解できなかった事の方が多いと思いますがそれでも得たものはたくさんありました。今までやったことのない動き、感じたことのない感覚を味わうことは言葉よりも深く体感できる事であり、非常に刺激的で興味深く、濃い2日間となりました。

日女で舞踊史を学んだ時にダンスの革命的振付家の存在をたくさん知りました。WSの講師はその振付家や直属の門下であった方々であり、このWSはとても貴重な機会であったことは間違いありません。また、私は高校生の時からFolkwangに興味があり、いつか留学したいとずっと考えていたため、この先、体験できないと思っていたことが実現することが出来、本当にこの時間が大切で、日女で、ダンスプロデュース研究部で良かったなと思っています。学生である彼らとダンスで交流できた事はとてもいい経験でした。ありがとうございました。



丸橋優花(3年) ダンス・プロデュース研究部(世田谷文学館との交流)

私達ダンスプロデュース研究部では、子供達に身体表現の楽しさを知ってもらう為、2年前から年に1度、世田谷文学館で子供対象のWSを行っています。毎年子供達が楽しんでもらえるような企画を考え、抽選で選ばれた約30人の子供達と交流します。今年は、「言葉を使わずにジェスチャーのみで誕生日順に並ぼう」「シャボン玉でチーム対抗」「ペンライトを使って夏に関するモノを表わそう」を企画しました。

「シャボン玉でチーム対抗」では大きなシャボン玉を作り、どのチームのシャボン玉が一番長く浮かんでいられるか対決をしました。子供達は普段作らない大きいシャボン玉に大興奮でした。

また、「ペンライトを使って夏に関するモノを表わそう」では部屋を暗くして、チームごとにペンライトの光と身体を使って「花火」「蚊取り線香」「アイスクリーム」「海」「かき氷」「オリンピック」を表しました。ペンライトの軌跡が写真に写り花火の形や蚊取り線香の形が現れているのを見て、子供たちは興味津々です。チームごとの見せ合いは一回のみの予定でしたが子供たちからもう一度やりたいとの声があがったので急遽二度目の発表会の場を設けました。子供たちが身体表現を心から楽しんでいる様子、私たちが投げかけたことに対して真っ直ぐ、素直に考える様子などを見ることが出来、やりがいのある企画になりました。



NEWS

【第69回全国中学校・高等学校ダンスコンクール】

2016.11/23 (水・祝) @メルパルク TOKYO

【3年生ダンス・パフォーマンス】

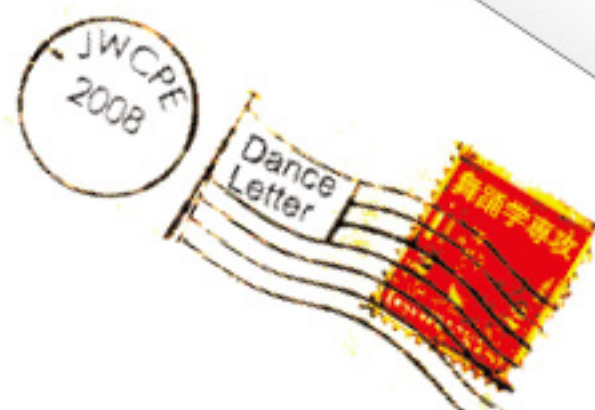
2016.11/27 (日) @総合体育館多目的ホール

【第15回舞踊学専攻卒業公演】

2017.1/24 (火) @府中の森芸術劇場 ドリーむホール

【SHOWCASE2017 冬】

2017年2月初旬 @総合体育館多目的ホール



発行

〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1
日本女子体育大学 運動科学科 舞踊学専攻

発行日:2016年11月23日

<http://www.jwcpe.ac.jp/>

日本女子体育大学 Dance Letter Vol.30

<http://www.jwcpe.ac.jp/>

SHOWCASE2016夏 1年生

岩田地世(1年) SHOWCASE(A1クラス) 撮影者:影山さくら

私はSHOWCASE2016夏で晴れてニチジョ生としてデビューしました。入学してクラスの雰囲気を含めない中練習が始まり、自分の得意なダンスを披露したり、テーマに合わせてインプロをしたりなどありとあらゆることをしました。みんなの前で改めて表現することにとっても緊張したのをつい最近のことのように覚えています。練習を重ねるにつれて踊りが組み合わされ、それに伴いクラスの絆も強くなっていき、徐々に作品へとなっていました。作品の特徴である「手話」はこれまで経験が無かったため、物にするまでにとっても時間がかかりました。しかし、意味を一つ一つ噛み砕いていくことで表現として踊りとして成立していききました。当日はこれまでの練習を無駄にさせないという思いで臨み、本番では仲間を信じ、心の底から楽しんで踊ることが出来ました。時間が過ぎた今でも練習風景や本番で見た景色が思い浮かびます。A1クラスのみさんと美潮さん、由佳さんに出会えたこと、「ハズム、今」という最高の作品に出演出来たことは私の大切な宝物となり、これからの糧となっています。先輩方が作品に込めた想いを胸に、これからも日々精進していきます。本当にありがとうございました。



影山さくら(1年) SHOWCASE(A2クラス)

1年A2クラスは「circulation(循環)」という作品を踊りました。人間が生きて行く上で必要な生物や物、それらは誕生し死んでゆき、求められ捨てられる。地球上にある全てのものは循環を繰り返している、この作品はそういったテーマを掲げられました。初めて出会ったクラスメイトと日女生として初めての作品を踊ることに皆期待と不安でいっぱいでした。慣れない環境の中ですれ違いが生じたり、先輩方には沢山迷惑をかけてしまいました。しかしいつも前向きで優しい先輩方はクラスをまとめてくださり、ラストパートはA2皆で一丸となり前へ前へ全力でした。本番当日を迎え、クラスメイトの顔は緊張で固いものの、ワクワクした雰囲気が見受けられました。踊り終えた後は達成感に溢れ、キラキラした表情の皆。「もう1回踊りたいね」という声を聞いた瞬間、このクラスの一人であったと心から思いました。Showcaseを通じて、踊り方や表情、体の使い方などの他に、お互いを感じて踊ることや周囲を見て空間を把握することなど学ぶ事も多く、出演することができ本当に良かったです。



塩川ちひろ(1年) SHOWCASE(A3クラス)

私たちA3クラスは「猫ノ目ニ山」という作品を踊りました。これは「変化するモノと変化しないモノの対比」を表現した作品です。作品の方向性が固まってきた頃から、この対比を自分たちの中にどう落とし込み、どう消化して表現するか、に葛藤する毎日でした。この作品はとても無機質なため、なかなかみんなの意識がまとまらず、表現する上でとても難しかったからです。それでも、二人の先輩方から温かく、優しく、そして厳しいアドバイスをいただき、クラスみんなで何度も話し合いながら、本番に向けて想いを統一していくことができました。本番の舞台上で私たち全員の想いがひとつになったあの感覚は今でも忘れられません。

この作品のおかげで私たちA3クラスの絆はいつそう深まり、ひとりひとりが大きく成長することができたと思います。そして、この経験はこれからも舞踊と向き合う上でとても貴重なものであり、この三か月間の練習の日々と、先輩から頂いたこの言葉を思い出せば、なんでも乗り越えていけると思います。

みずきさん、ゆりさん、ありがとうございました。

「目まぐるしくも動じず」

目まぐるしい日々でも、その変化に流されてたえ自分自身が変わってしまうことがあっても、心の奥にあるものはぶれずに信念をもって堂々と、変わることなく在り続けてほしい。



廣瀬萌衣(1年) SHOWCASE(B1クラス)

振り付けをしてくださる先輩と初めて会ったのは上級生パフォーマンスの後でした。偉大な先輩と初対面し、自己紹介をし、B1クラスのみさんと先輩と一緒に作品を完成させるのが楽しみになってきました。練習が始まり、まず最初にしたのは体幹トレーニングでした。全員が輪になり、松田聖子の「青い珊瑚礁」に合わせて一曲終わるまでトレーニングし続けるというものでした。それが私のクラスの練習前の恒例の行事になりました。最初はきつくて大変だったけど、回数を重ねていくうちに筋肉が付いてきて楽になってきました。

私のクラスの作品は、トルコ行進曲とチャップリンの「modern times」の二曲で構成される作品でした。トルコ行進曲は4人ずつ列になって列ごとに部位を動かす同じ振りをするため、合わせるのが難しかったです。チャップリンは全体的に明るくてコミカルなので表現を大きめにすることを意識し、お客さんにクスッと笑ってもらえるように工夫しました。本番に近づくにつれ段々と練習の量も増えていき、体力的にきつくなってきましたが先輩と会えると思うと全く苦ではなかったです。トルコ行進曲の列がなかなか揃わず、本番ギリギリまで練習していました。追い込んだため合わせようという気持ちが揃ったのか、本番は今まで一番良い出来で終わる事ができました。私は不安要素がたくさんあったので終わった時にほっとした気持ちもありましたが、もう練習がないのだと思うと寂しい気持ちの方が大きかったです。良い先輩に恵まれ、楽しい時間をクラスのみさんと一丸となって踊る事ができてよかったです。最高の思い出になりました。



宮川奈々(3年) 表現運動学実習(フォークダンス)

非常勤講師の山梨先生に3日間、フォークダンスの授業をしていただきました。私は高校生の時に体育の授業で少しかだけフォークダンスの経験をしたことがありました。しかし、それとは比べ物にならないほどたくさんの種類のフォークダンスがあつてとても驚きました。また似ているステップや難しい名前前のステップなどもたくさんあつて様々な動きを学ぶことができました。各国のカラーや雰囲気のある曲でダンスすることができてとてもいい経験になりました。3日間で学べたのは10個ほどでしたがもっともっとたくさんあると先生がおっしゃっていたので他のものも踊ってみたいと思いました。

授業内でマイム・マイムの要素を入れつつ自由に創作するという内容があつたのですがそれも各グループの個性が発揮されて舞踊学専攻ならではのたのしい作品を作ることができました。このフォークダンスの授業ではフォークダンスを踊ること以外に振りや文字だったり絵にして紙から振り起こすことができるようになることも目標の1つでした。初めて見た人が理解できるように書くのは大変でしたが、それもまた勉強になりこの経験を今後活かしていきたいと思いました。



コンクール

水村里奈(4年) アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ 撮影者:阿部真理亜

この度、アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ(大学生対象の全国ダンスコンクール)に本学代表として出場し、自作ソロ作品が北日本新聞社賞(第4位)を受賞致しました。今年で私自身3年連続受賞となり、今年は今までで1番良い賞を頂けたことを心から嬉しく思います。本大会との出会いは私が2年生の時「自分の力量を試したい」という思いで応募したことでした。学内選抜を経て先輩2人とのトリオで挑んだ初出場時は特別賞を受賞、昨年は同期とのデュオで同じく特別賞を頂きました。こうして自身のダンスを賞という形で評価して頂けることは、とても嬉しく自らの励みになり、ダンスの更なる追求心や向上心に繋がりました。また本大会は全国から個性豊かで幅広い感性を持つ作品が集結するため、出場するだけでダンス表現の未知なる可能性を目の当たりにすることができ、そこから吸収することも多くありました。本大会の集大成としてソロで出場した今年は、過去最も険しい船旅だったと思います。試しては崩しての繰り返し、1人だからその自由さと孤独と格闘しながらも目的地を目指して作り上げて行くことの難しさを痛感しダンスと自分を見つめ直す良い機会となりました。今思えばその過程こそ意味があったのだと感じます。この大会を通して多くのことを得られたように、今後も常に自分に挑戦するものを与え少しずつ成長していきたいです。



名越晴奈(4年) なかの国際コンペティション

私は、8月に行われた東京なかの国際ダンスコンペティションのモダンダンスシニア部門で、入賞4位を受賞することができました。ご指導くださった先生方、先輩方には感謝の気持ちでいっぱいです。

コンクールには小学生の頃から出場していましたが、いつも先生に振付をしていただいていたので、大学に入ってから自分で作る作品の難しさに直面し、とても苦戦しました。大学一年の頃は自分の強みや特技もわからず、振付をすることがとにかく苦手で仕方なかったです。しかし四年生の今、作品のことを考え、踊り、追求していく過程がとても楽しいと感じています。今回のソロ作品「祖国へ…」は3月から踊っていますが、当初と今では振付や表現が大きく変わってきています。現在に満足してしまうのではなく、常に野心を燃やし続け、じっくり作品と向き合うことが大切だと、今回強く感じました。そういった意味でも、作品が変わっていくことも創作の醍醐味なのではないかと思っています。

これからも、今回の受賞や現状に満足することなく、踊りと向き合える環境に感謝しながら、新たな目標に向かって貪欲に挑戦し続けたいです。



部活動・サークル活動

弓田さおり(4年) モダンダンス部(神戸ダンスフェスティバル)

私たちモダンダンス部は、8月3日から6日まで神戸で開催された第29回全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)に参加しました。今年は画家マルク・シャガールの亡き妻ベラへの愛をテーマに「人生のパレット~愛の画家が残したもの~」という作品を創作しました。シャガールが描いた絵からは柔らかく、温かみのある世界が見取れますが、ベラの急死後はその悲しみや、記憶を辿るかのような2人の姿が多く描かれています。シャガールの絵が持つ幻想的で華やかなイメージの一方で、その奥にある深い悲しみや苦悩をどう作品にのせていくか、試行を重ね創作しました。特に感情変化のきっかけとなるシーンは、動きの改善や合わせだけでなく、質感や表情の変化をどう付けていくのか、繰り返し構想を練り、何度も練習しました。次第に呼吸までもが揃っていき、音楽に頼らずに「身を以て伝えたい」という全員の思いが前へ前へと出てくるようになりました。結果は、特別賞(感性にあふれた優れた動きのテクニックに対して)を受賞する事ができ、作品を見ていた方からも「心に響くものがあった」と言葉を頂けて、本当に幸せに感じました。応援して下さいました皆様、指導して下さいました先生への感謝の気持ちを忘れず、今後も精進していきたいです。



田澤瑞季・寺尾優里(3年) SHOWCASE振付者(A3クラス)

私達は自分たちが1年生だった頃に振付をしてくださった先輩に憧れ、今回1年生振付に挑戦しました。2年生の冬から準備を始めましたが、4月に1年生と出会い、それから本番までの約3ヶ月間で私達が求めているものを7分間の作品に凝縮することは、非常に難しいことでした。作品を創ることはもちろんですが、入学して間もない1年生たちに私達がやりたいこと、SHOWCASEとは日女生にとってどのような存在なのか、そしてこの作品を通してどうなって欲しいかを伝えることに頭を悩ませました。突然発表された振付者と、性格も踊ってきたジャンルも違うクラスの仲間たちと始まる練習の毎日に、悩んだり辛い思いをした1年生もいたと思います。「目まぐるしくも動じず」これは作品を通して私達が伝えたいメッセージです。毎日様々なことが変化する中で心の奥にあるものはぶれずに信念を持って堂々と変わることなく在り続けて欲しい。本番に舞台上から見せてくれた集中力、踊り終えた時の達成感ある表情を見てきっとこのメッセージは伝わったのだと嬉しく思いました。この作品での経験を忘れずに私達振付者も含め、それぞれが堂々と踊っていくことができればと思います。最後になりましたが、寺尾、私達についてきてくれたA3のみんな、スタッフのみなさん、本当にありがとうございました。



中村たから・野本結(3年) SHOWCASE振付者(B1クラス)

私たちは、偶然生まれる笑い、面白さをテーマに作品を作りました。大学に入学して初めての舞台、ショーケース夏は明るい楽しい作品を踊って欲しいという願いも込め、このテーマにしました。だからといって単純な作品にはしたくなく、機械的に動いている中で生まれる偶然性、偶然関連性を持った様に見える演出、そして動きの質感など、こだわりをもって作品作りをしていきました。より良いものと思う気持ちから行き詰まったり、振りや構成をどんどん変えていくことが多く、1年生を振り回してしまう結果になったことが振付者としての反省点です。もっと計画性が必要だったと思います。初めてコンテンポラリーのような作品に触れる1年生も多く、最初は少し戸惑っていたようですが、練習が進んでいくにつれ積極的に作品作りに関わってくれました。私達が完璧な振付者じゃないからこそ、振付者とダンサーと一緒に作品を作り上げることができ、みんなと一緒に成長できたなと思います。4月から本番まで、大学に入学したばかりの1年生と正面から向かい合い、振付者という立場と一緒に作品を作ったことは大変貴重な経験でした。最後まで直向きに私達について来てくれたB1のみんなに本当に感謝しています。



斎藤みなみ・長岡慧玲奈(3年) SHOWCASE振付者(B2クラス)

クラスの子達が本番を終え、控室に泣きながら戻って来る姿を見た瞬間が私達の中で振付をやった良かったと思えた瞬間でした。それはあまりにも皆の流す涙が綺麗過ぎたから。今でも覚えています。きっとあの時見た涙は私達の中で一生忘れないだろうなと思いましたが、彼女達にもSHOWCASEとはそう言う存在であってほしいと、慣れない大学生活の中で、ほとんど毎日朝練できると本当は辛かっただろうに、練習が始まるとそんな姿を一切見せずにいて来てくれる皆の姿は、私達にとっての原動力でもありました。いつしか練習を重ねていくうちに、私達の期待を遥かに超えていた皆の姿に気づいた頃にはもうSHOWCASEの前日でした。これは大成功すると確信していました。不思議なことに、会ったときからB2から醸し出る雰囲気もう既に作品のイメージそのものだったのです。今思うと、それは奇跡だったのか、不思議なまじりません。「1年生振付とはこんなにも素敵な経験が出来るものだったのだろうか」これもB2の皆に出逢えたからだなと思っています。本当にありがとうございました。



頼岡ひかり・前川花凜(3年) SHOWCASE振付者(B3クラス)

今回、B3クラスのSHOWCASE振付を担当し、私たちは本当に様々なことを学ばせていただきました。振付を考えることはもちろん、作品づくりの中で入学して間もない、出会ったばかりの1年生に合わせて方向性を修正したり、作品の世界観を1年生の立場に立って説明する必要があったので、常に柔軟な考えを持ち、いかなる場にも対応することを勉強させていただきました。私たちは作品を考え、振付をわたす役割を担っていましたが、逆に1年生に教えてもらうことばかりだったと思います。この『気付くとわたし』は、子供が大人になる過程において心の中で起る葛藤や死への意識、自己主張を表現した作品です。これこそ現在の1年生の姿であり、私たちの心の中だったのかもしれない。まだ大人になりきれない未熟者がなんとか「大人」という架空の生き物を想像し、それを目指そうと苦しむ、それは作品を考える私たちの姿であり、それを与えられた1年生の姿であったのではないかと思います。気付くとわたしもこの作品のようにもがき、苦しみ、笑い、常識の枠にとらわれぬよう足掻いていたのだと、そう気付いたのもここ最近です。この模範解答のない世界観によって首を絞められる思いでしたが、この作品に向き合ったことで本当にたくさんの事を感じることができました。支えてくださった先生方、スタッフの方、保護者の方、友人、全ての方々に感謝しています。ありがとうございました。



ワークショップ

加瀬菜々子(4年) 池田扶美代さんワークショップ

今回のワークショップではその場の状況を見ながら自由に動くものや、振り移していただいて動くものなど様々でした。大勢で自由に動く、やはりいろいろな場所で次々と何かが起こっていて、それが偶然にも他の場所で繋がったりと、その場でしか生まれない面白い瞬間がたくさんありました。また三角形に密集しての移動もあったのですが、先導する頂点の近い位置と遠い位置ではやはり動きの幅が変わり、このようなことは大勢での作品の良いヒントになると思います。

振り移しは、いただいた振りを好きなカウントで動き、13×8カウントの中で収めるというものでした。初めての方法だったので難しく感じましたが、何人かで合わせると同じ振りでも個々のこだわりが見え、作品の1シーンのようにも見えました。しかし振りのニュアンスについては振付者のこだわりがあるため、そもそも個々の動きになってしまうのは違うということを教えていただきました。そこで、振付者のこだわりを無視し自分なりに踊ってしまうと、作品に統一感が見えない原因だと気づくことができました。

最後に、今の私達がどのような傾向にあるのか、私達と同年代の海外ダンサー、作品創りについてなど、貴重なお話をたくさん聞くことができました。今の私にはとても重要なことばかりで、考え方が変わった点も多い、充実した時間だったと思います。

関根詩乃(3年) 機材ワークショップ 撮影者:関根詩乃

機材ワークショップはダンスプロデュース研究部の活動として一ヵ月に一回行われ、プロの方から機材の種類や設置の仕方、扱い方などを学ぶ活動をしています。ダンスプロデュース研究部の活動では学校行事や部活動の発表会での舞台スタッフをする機会があるため、機材WSの活動はとても活きていると思います。普段踊ることが専門である私たちが実際に機材に触りスタッフの方がどういった作業をして、それらの作業が私たちダンサーにとってどれだけ大事なことを実感できるワークショップだと思っています。この活動をしていて、舞台の裏方に興味を持ってくれた生徒もたくさん増え、学校行事などの舞台の際、スタッフとして活動も多くしているダンスプロデュース研究部員も増えました。スタッフの経験として生かせるだけではなく、ダンスの作品をつくるうえで照明の種類やそれらの見え方、照明の色と衣装の見え方についてなど参考になる要素をたくさん学ぶことができます。私は、これから3年生パフォーマンスや、卒業公演に活かし、素敵な舞台をつくっていきたくと思っています。



前期授業

村山紫織(4年) スペイン舞踊

前期の授業でスペイン舞踊を学びました。スペイン舞踊は日本人には慣れない独特のリズム感を持ち戸惑うこともあり、腕の使い方なども難しく、日頃からダンスをしている私達も筋肉痛になることもありました。授業中は先生がお持ちの明るさでスペインの雰囲気を感じられたような気がして楽しく取り組むことが出来ました。授業最後のテストの日には、ギターを演奏して下さる方、スペイン舞踊のダンサーの方も来てくださり生演奏の中、贅沢に踊らせて頂きました。テストの後には実際に先生とダンサーの方が目の前で踊って下さりました。私は映像では見たことがありますが生で観ることは今までなかったので拝見することができ、とても良い経験をさせて頂きました。

今回スペイン舞踊も学んだことにより、スペインやスペイン舞踊への興味も深まりました。フラメンコ発祥の地に行く機会があればハレオ(掛け声)や軽いステップなど少し参加できそうな気がします。今後スペイン舞踊で学んだことを活かせる機会があれば良いなと思っています。先生の一人ひとりへの丁寧で熱い御指導に感謝しています。有難う御座いました!



川内優花(2年) 野外上演法 撮影者:伊藤有芽

今年は野外上演法始まって以来、初めて100人での作品づくりとなりました。私自身このような大所帯をまとめるのは初めての経験であり、責任重大だと感じていました。各クラスのリーダーたちと進め方を話し合いながら毎回の授業に挑みました。

今回選んだテーマはピンク・レディーです。他の学年にはない私たちらしいカラーを出していきたいという思いで臨みました。創作の第1段階では、各クラスで分担した振り付けを発表することから始まりました。同じ曲でも各クラスで全く違った印象のものが生み出され、踊りの面白さを改めて感じられました。第2段階は、提案した振りを組み合わせる作業です。100人が一斉に動くので、指示をうまく出すことに苦戦しました。このとき、周囲の友人たちのサポートにすく救われました。ありきたりな言葉になってしまっていますが、1人じゃないのだと安心することができました。第3段階は最終調整です。細かい動きを合わせ、移動をスムーズに行えるよう練習を重ねました。

そして迎えた本番当日。生憎の雨となってしまう、場当たりやリハーサルなしで本番を迎えることになりました。沢山滑って転び、位置どりも上手くいかず、決して大成功とは言えませんでした。しかし、1人も欠けずに楽しく踊りきったことに意味があったと思います。卒業までにこの仲間たちと更に高め合っていきたいと感じました。



寺園まほろ(1年) タップダンス

タップの授業は、今までにタップダンスに触れてこなかったからということもあり、ほかのジャンルの授業とは違い、独特な授業でした。さすが、シューズを履いてそのシューズで奏でる音色と踊り手の姿でお客様に見せるという2つの技巧を持ち合わせることで初めて成り立つものなのだ、と学びました。授業では、プロである先生の足さばきを目の前で見ることができ、それを見るたびに私はタップへの興味がどんどん湧き、「もっともっと上手になりたい」「技を自分のものになりたい」という向上心が芽生えてきました。そして、毎回音色を響かせるたびに、何とも言えない心地の良い気持ちになりました。

今でも心に残っているのが、授業の最初に行うアップと授業の中で先生が振り付けをしてくださった「High school musical」のナンバーです。最初のアップは思っていた以上にハードで、それだけ体幹の強さや体の身軽さ、バランスが必要なのだと思います。「High school musical」のナンバーはリズムカルでポップ、1年生の私たちらしいフレッシュなナンバーでした。ステップは難しかったけど、楽しくて、タップの魅力をひひしと感ずることのできるナンバーだ、と踊りながら感じました。また、初めて経験するタップと真正面から向き合い、魅力を肌で感ずることができて、たくさんある授業の中でもとても貴重な授業だと思いました。



藤本舞(1年) SHOWCASE(B2クラス)

入学して間もないうちに、SHOWCASEの練習は始まりました。同じクラスの子のこともまだまだあまり分からず、大学生活にも慣れていなかったため、最初の頃は、練習がある度に少し緊張していました。まだ振りやカウントで合わせ、注意して頂いたことを考えながら踊っていた頃は、練習を重ねると皆の振りが揃い、自分たちにも目に見えて作品が上がっていくを実感することが出来ました。それだけでは、観客の方々の心には響かないということが段々と分かってきました。そのため、一つ一つの場面ごとの様な想いをこめて踊れば良いのかなど、いつもクラスの皆で考え、気持ちを一つにして踊ることを意識しながら練習していましたが、中々手応えを感じることが出来ず、皆でとても悩んだ時期がありました。楽しい事や辛かった事など全部含めて、皆この「oson」という作品が本当に大好きでした。それと同時に、B2のクラスと先輩方のことも本当に本当に大好きでした。きっと皆、本番はその素直な気持ちを作品に込め、舞台上で立っていることを楽しんで踊っていたと思います。そんな素敵な作品を創って下さり、クラスの仲まで深めて下さった先輩方お二人と、大切なB2の間に感謝の気持ちでいっぱいです。SHOWCASEはかけがえの無い時間でしたし、この思い出が宝物になりました。有難うございました。

集中講義

角田莉沙(3年) ダンスカレントA 撮影者:前川花凛

今回ダンスカレントAを受講し様々な観点から舞台やダンスについて触れたことで、新しく得ることが非常に多かったと感じています。授業のテーマである「音の無いダンス」から作品を作るには、自分の創造力や発想力が試され、また今まで観てきた舞台作品の記憶が重要なキーになった気がします。音響についての講義では、絵画や写真から音を想像するという体験が印象的でした。素材をもとに様々な音を想像しましたが、それらは全て経験から抽出した音なのではないかということに気がきました。経験という材料は一見便利でもあり、逆に言うと新しい発想の妨げになっているのかもしれないと感じました。照明に関しては色の感覚が問われるのと同時に、体力仕事でもあるなと感じました。機材は一か所に固定するばかりでなく何回も移動させたり変化させる必要があります。また、ダンサーに怪我がないように機材の一つ一つに細心の注意を払う必要があり、常に色々なところを見て異常に気付くことが大切だと学びました。3名の先生方は常に「ダンサーのために」、「ダンサーが一番良く見えるように」という言葉をおっしゃっていました。本番では観客の目に触れることのない役割ですが、作品を成立させる為に非常に重要な仕事をして下さっていると強く実感し、今後踊っていく上で感謝の気持ちを忘れずに胸を張って舞台上に立とうと思いました。



白崎雛(4年) ダンスカレントB 撮影者:延原早希

9月5日～7日まで行われた集中講義のダンスカレントBでは、今年はコンテンポラリーダンサーの島地保武さんにご指導を頂きました。受講者はそれぞれ専門ジャンルの違う4年生5人といった少人数で、3日間9時～17時まで乗り切れるか不安だと5人で話した日もありましたが、いざ始まると時間はあっという間に過ぎていき、絶対に受講すべき授業であったと感じました。毎回みっちりクラシックバレエのフルクラスから始まり、日常の動作から動きを作っていき創作の時間や、それらを互いに見せ合い、覚え、踊るといったコンテ、そしてコンタクトワークなどを通過したうえで、普段中々踊る機会のないネオクラシックを習いました。最終日には、その3日間で行った『全て』を繋げて、島地さんにご指導を受けながら約18分の作品を作り、発表をしました。休憩の1時間を除き、7時間毎日ずっと踊っていて体力的に厳しく感じる事ももちろんありましたが、こんなに少人数で1人1人細かく見て頂き、学べることが多い授業は中々ないと思います。終わってみると受講して良かったという思いでいっぱいです。たった3日間ではありましたが、自分の中の動きのポキャプラーが一気に増えたように感じました。後輩の皆さんにも是非受講して貰いたいです!



新津紫穂(3年) 表現運動学演習(演技)

前期試験が終了し、夏休みに入った直後の8/5～8/9の7日を除く4日間に行われました。集中講義のため時間をかけて行うことは出来ませんが、その分とても中身の詰まった内容でした。授業のウォーミングアップとして空間を埋めながら「相手から発したものをキャッチし、それをまた相手に渡す」ということをしました。演技は「言葉のキャッチボール」といい、相手が何か発したことに対して受け止め、それを相手に返すということが行われます。これを「言葉」から「指パッチン」に変えて、相手から投げられたものを受け取り、それをまた違う相手に投げるということを行いました。これは言葉を使わなくても相手とコミュニケーションが取れる方法でもあります。その他にも、他人の癖を見つけて、自分とは違うキャラクターになって即興劇をしたり、受講者一人一人の歩き方を見て細かく分析し、他の人の歩き方を真似したり、物質の動きを見て自分の身体で表して見たりなど、様々なことを限られた時間の中で行っていきました。台本を使い、動きをつけその一連の流れを発表する、ということも評価の1つとして行いました。2つのグループに分かれ、同じ台詞でも動きやそれぞれのあり方が違うだけで全く違うものに見えました。



吉田汐花(1年) SHOWCASE (B3クラス) 撮影者:前川花凛

私達B3クラスは思春期を主な題材とし、思春期の中で抱いた不安や怒りなどの感情を表現した。目指すのは見ている人が罪悪感を覚える作品。最初はインプロを多く取り入れ、自分の殻を破る作業から始まった。しかし私にはこのような経験はなく、自分の感情をさらけ出すことへの難しさを感じ、戸惑うことが多かった。実際に振り付けをいただいても、自分の思うように踊れずに周囲との技量の差を痛感させられた。そんな自分に悔しさと憤りを感じ、悩む日々が多くなった。一方、クラスでは空き時間に集まろうという声も積極的に出るようになった。練習では多くの意見が飛び交い、最善の方法を見つけようと試行錯誤をしては手直しをする。そんな繰り返しの連続だったが、とても有意義な時間だった。気づけば以前のように落ち込むことはなく、前向きなみんなの姿に励まされる自分がいた。様々な壁にぶつかったが、練習と話し合いで乗り越え、無事に本番を迎えられた。



入学して初めての大きな舞台で、B3のみんなと素敵な先輩方と『気づくと私も』を作り上げられたことが嬉しいし、良い経験になったと思う。だがこれで終わりではなく、ここから卒業までの時間を充実させていきたい。

SHOWCASE2016夏 振付者

田山由佳・時田美潮(3年) SHOWCASE振付者(A1クラス)

日女に来て本当によかったと思うのが、このSHOWCASEであったと思います。一人一人個性が違うみんなと作品を作り上げていく楽しさを味わい、凄く恵まれている環境にいるのだなと実感することができました。また、今回1年生の振り付けをしてみて1番感じたことは、1年生たちの可能性です。今までは違った動きとの出会いに戸惑いながらも、とても素直に一生懸命に向き合うみんなを見て、SHOWCASEの期間にごく成長するのだろうと思うのと同時に、私たちが振付者として色々なことを学ばせてあげたいと思いました。そして、一丸となって作品を作るという中で責任感や達成感などをより強く感じる事が出来たのではないかと思います。クラスのみならず私たちの想いに全力で応えようとしている姿に胸が熱くなるものがありました。

今回のSHOWCASEを通してたくさんの方の事を吸収してきていたら嬉しいです。また、ジャンルにとらわれず様々なことに挑戦して行って欲しいと思います。A1のみんなと一致団結して作品を作ることができてとても楽しく、私たちにとってとても貴重な経験、大切な時間となりました。この夏の最高の思い出です。



村井玲美・矢島茜(3年) SHOWCASE振付者(A2クラス)

2年前、私にとってのSHOWCASEは、それまでよりもダンスや作品について考えるようになった刺激的な機会でした。そのSHOWCASE1年生作品に、それも2年前同じクラスだった矢島と振付者として関わったことはとても嬉しいことです。創っていく上で私が一番大切にしたいと思ったことは、小さなことでもいいから何かを吸収し、自分の中の何かしらの変化を感じてほしいということでした。入学してすぐ、大学での時間をSHOWCASEにかけるので、1年生にはその時間を無駄にしてほくはありません。そのために作品の解釈や、各シーンのイメージなど、つらつらと話したこともありましたが、A2のみんなは真剣に聞いて考え、作品に取り組んでくれました。そして先生方にもアドバイスいただき、また私たちも、他人の動き(振付)に自分の意思を持ってやってほくして1つ1つの動きのイメージを言葉でも伝えよう意識しました。そうして練習を重ねていくうちにA2の皆さんの動き方に変化ができました。以前よりも動きの可動範囲が広がり、みんなの素直なエネルギーがどっと出てきたのです。

それは明らかな変化でした。決してみんなが年下だからというわけではなく、人が成長し良い方向に変わっていくのを見られるというのは、嬉しく、とても刺激的なことです。

作品も出来上がるのが遅く、皆さんは色々大変だったと思いますが、自分たちで声を掛け合い、気になったところはすぐ話し合うなど、率先して作品に関わろうとする皆さんに触れ、私も勉強になり大切な経験となりました。先生方、助手のみなさん、スタッフをやってく下さった皆様、そしてA2のみんな、ありがとうございました。

